

空襲の惨禍に何を思い、何を描いたのか

アジア・太平洋戦争のさなかの1945年(昭和20)3月以降、アメリカ軍は日本の各都市に対して激しい空襲を実行するようになります。その結果、日本が降伏する8月までに、広島と長崎への原爆投下も含めて全国で66の都市が大きな被害を受けました。

岡山のまちも1945年(昭和20)6月29日に空襲を受け、アメリカ軍の爆撃機B-29によって約890トンの焼夷弾が投下されました。この空襲で、当時の市街地の63%が焼け野原となり、多くの人々が傷つき亡くなりました。

岡山空襲に関しては多くの資料や証言が残されています。そのなかには、空襲体験者が空襲の惨禍を描いた絵もあります。彼らが筆をとったのは、カメラがない代わりに記録を残す手段として、あるいは時間が経つなかでうすれゆく記憶を形に残すためなど、事情はさまざまだったでしょう。しかし、そこに共通するのは、自分の見た光景や体験を後世に伝えたいという強い思いです。

今回の展覧会では、空襲体験者が描いた絵から彼らの記憶や心象をたどるとともに、空襲を実行したアメリカの軍事資料、公的機関や各家庭に残された記録などをひもといて、岡山空襲の実態と被害を詳しくご紹介します。

この展覧会をとおして、戦争の悲惨さと平和の尊さについて改めて思いを深めていただければ幸いです。

岡山空襲について

1944年から1945年にかけて、日本全土の市街地を対象とした大規模な空襲がアメリカ軍によって行われました。岡山市の場合は1945年6月29日に大規模な空襲を受け、当時の市街地の63%を焼失し、少なくとも1737人^{*}の死者が出ました。
(^{*}2000人をこえるという説もあります。)

空襲を知る——日本本土空襲と岡山空襲



空襲を受ける岡山市街地 1945年6月29日
原資料：アメリカ国立公文書館所蔵 工藤洋三 提供

アメリカ軍が日本本土空襲の実行に至った経緯、岡山への空襲がどのように計画され実行されたのか、そしてどれだけの被害が岡山のまちに生じたのかを、岡山空襲展示室が所蔵する実物資料や写真を中心にをご紹介します。



岡山空襲で投下されたM47焼夷弾とM74焼夷弾

高畑勲と岡山空襲、そして『火垂るの墓』



晩年の高畑勲 寺越陽子撮影・提供 2016年

アニメーション監督の高畑勲(1935～2018年)もまた岡山空襲の体験者でした。当時9歳で、焼夷弾が降るなかを11歳の姉とともに必死で逃げたといいます。この体験が、のちにアニメーション映画『火垂るの墓』(1988年)を手がける動機のひとつとなり、その作中の表現にも大いに活かされました。

空襲の体験者でありながらも、彼がその詳細を公の場で語ることは長らくありませんでした。しかし、2015年の岡山市主催の平和講演会に登壇し、多くの聴衆の前で、自ら「人生最大の出来事」と位置づける凄惨な体験を初めて詳しく語ったのです。

このときの講演会の貴重な記録映像をご覧くださいくとともに、高畑勲が経験した空襲と『火垂るの墓』で描き出した空襲を解説する特別スペースを設けています。

「あの日」を描く

空襲のさなかでまちが燃える様子を見ながら、あるいは当時を思い出しながらかかれた岡山空襲の絵からは、彼らが見た光景のすさまじさをうかがい知ることができます。



「無題」 金谷哲郎 作 1945年
岡山操車場付近に投下された大型焼夷弾の様子を、北区万成から見て描いたもの。



「記憶の中の空襲1」 窪田裕一 作 2019年

焼け跡を描く

空襲により、岡山のまちの中心部のほとんどが焼け野原となりました。残された絵と記録写真とを比較しながら、空襲の被害についてご紹介します。



岡山地方専売局の焼け跡 片山栄一撮影 1947年



素描「専売局の焼跡を望ム 昭和二十一年二月五日」
中田政夫 作 1946年

復興を描く

終戦後、進駐軍による占領統治が始まり、社会制度や人々の生活は戦時中から大きく変わってきます。それと並行して焼け跡の復興も進み、岡山のまちは徐々に活気を取り戻していきました。

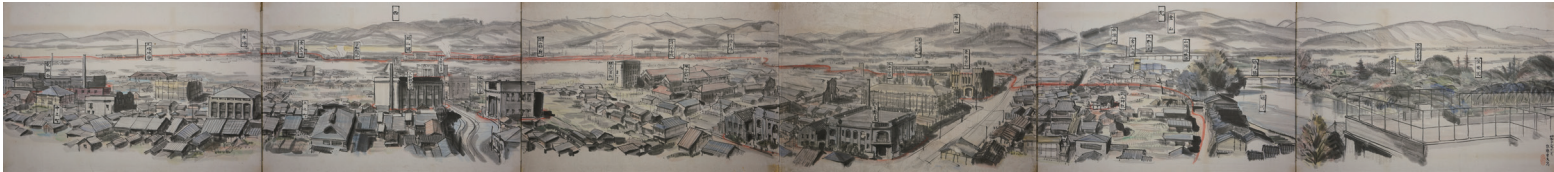
その光景を多くの画家たちが描き残しています。なかでも、岡山市の復興計画の初期案にも関わった建築家・佐藤重夫が描いた屏風は圧巻です。



素描「備前焼見物」佐藤一章 作 1945年
岡山市立中央図書館所蔵・画像データ提供



素描「ソバは賣る 柳川付近」佐藤一章 作
岡山市立中央図書館所蔵・画像データ提供



「戦災復興岡山市の図」屏風(右隻) 佐藤重夫 作 1947年 岡山市立中央図書館所蔵・画像データ提供